

第7回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<高校の部 佳作>

「その笑顔を見るために」

笠原佳奈

「お前うるさい。」

そう言って寝ていたお父さんに怒られた。時計は午前二時を指している。こんな真夜中にハンドミキサーをガンガン鳴らし、オーブンの焼き上がり知らせるメロディーを家中に響かせて私はひたすらマカロンを作っていた。なんでかって？そんなの決まっているじゃないか。恋する乙女の年に一度の一大イベントのバレンタインデーだからだ。なぜこんな真夜中に作っているかって？部活で休みがなく夜しか時間が取れなかったのだ。作る時間がなかったのなら買えばいいと言われるかもしれないが、パティシエールを目指している私が作らずに買うなんてプライドが絶対に許さない。じゃあ日をずらせばいいって？それはもっと許されない。なぜなら私はこのバレンタインに賭けているからだ。

朝、学校に行くと恒例の友チョコの交換があっちこっちで行われていた。もちろん私もその輪に混ざる。

「やば、めっちゃ美味しい！マカロン嫌いなのにこれ食べれる。むしろ好き！」

評判はかなり良い。しかし、今年のバレンタインはこれで終わりではない。

部活が終わり、仲が良いのでいつも一緒に帰る彼と並んで帰路についた。

「チョコレートもらえたんー？」

なんて何気ない話をしながらも、私はマカロンを渡すタイミングを窺っていた。緊張のあまり私の心臓は破裂寸前だ。

「元カノとヨリ戻すことにした。」

彼のいきなりの台詞だった。涙が零れないように必死で耐えた。鞆の中には一番上手く出来たピンク色のマカロンがただ一つ残っているのに。

「……これ義理チョコやけど余ったしあげる。」義理チョコなんて嘘。余ったなんて嘘。

「おっ。サンキュ。うまつ！流石お前やな。」そう言って彼はニカッと笑った。あーもう！これだからお菓子作りはやめられない。